平成27年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
（研究成果の社会還元・普及事業）
実　施　報　告　書

ＨＴ２７０７５　　プログラム名　本を残す　本を伝える　～書籍の保存と修復

開　催　日：　平成 27 年 7 月 20 日（月・海の日）

実 施 機 関：　一橋大学
（実 施 場 所）　（社会科学古典資料センター）
実施代表者：　山﨑　耕一
（所属・職名）　（社会科学古典資料センター・特任教授）
受　講　生：　中学生 4 名、高校生 5 名
関 連 ＵＲＬ：　http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/hirameki.html

【実施内容】

■受講生にわかりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

本事業のもとになった科学研究費採択課題は、「メンガー『国民学原理』初版特製本における書き込みの復刻とその内容分析」（課題番号　14530004）および「西洋社会科学古典資料の書誌学的調査に基づく印刷地推定法に関する実証的研究」（課題番号　23330066）であるが、細かい内容に立ち入って説明するよりも、その基礎にある考え方、特に西洋社会科学文献の奥深さや書物の修復・保存の重要性を伝えることを目的とした。

プログラムの内容については、西洋古典資料の紹介と保存活動の説明という二つの課題を様々な仕方で体験してもらうものとした。さらに本年度は、附属図書館貴重書室で和書の古典籍の見学も行い、洋の東西で書物にどのような違いがあるか、保存方法をどのように変える必要があるかを考察してもらった。

具体的な留意点は以下の通りである。

1．実物による体験を重視した

①本に囲まれた環境を体感できるよう、図書室（社会科学古典資料センター）を主会場とした。普段は立ち入れない貴重書庫内で西洋社会科学古典書籍等の紹介を行うことで、大学の専門図書館のアカデミックな雰囲気を体感してもらうと共に、保存環境維持のためどのような配慮をしているかを実際に見学できるようにした。

②あらかじめ数種類の羊皮紙を用意し、実際に触ってもらい、違いを実感してもらった。

③社会科学古典資料センターに附設されている保存修復工房で実演および実習を行うことにより、資料保存の理念と実際を実地に体験できるようにした。実演および実習指導には、普段から保存活動に携わっている工房職員に活躍してもらった。

④隣接する一橋大学附属図書館の貴重書室で和書貴重書を見学する時間も設け、資料の保存と利用という目的を達成するために二つの機関がどのような方法を採用しているかを説明し、両者を実地に比較させた。

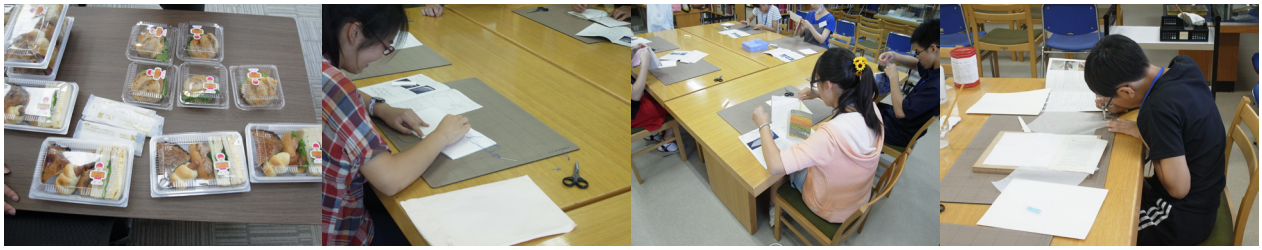
2．資料や教材を充実させた

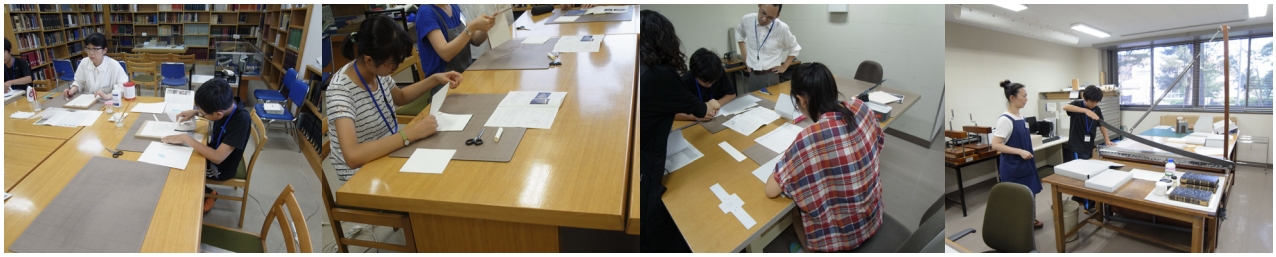
①予習だけではなく後日の復習にも役立ててもらえるよう、あらかじめ B4 大 24 ページのパンフレットを作成し、送付した。パンフレットには、紙のなりたちや歴史的製本の方法、一橋大学社会科学古典資料センターが所蔵するホッブズ『リヴァイアサン』や『マグナ・カルタ』についての説明、実習でおこなう紙の修理、製本、保存容器

の作成方法の図解、保存や製本に関する本やウェブサイトの紹介などを掲載した。
②実習で作成したマーブル紙表紙のノートと保存容器をそのままお持ち帰りいただいた。ノートと保存容器の作り方をパンフレットで詳しく解説した。
③広報用の栞や修了証を、資料保存用に用いられる特殊な中性紙で作成し、持ち帰ってもらった。

■実施の様子

午前中は開講式の後、マーブル紙を使った製本や、社会科学古典資料センター書庫が収蔵する洋書資料、附属図書館貴重書室が収蔵する和書古典籍の見学を行った。昼食後はグループに分かれて、マーブル紙を表紙に使って糸で綴じたノートの作成、和紙としょうふ糊を使ったページ修理、持参した本の保存容器づくりなどの実習に取り組んだ。





■事務局との協力体制

日本学術振興会との折衝、会計管理、学内の事務手続き等を学内のそれぞれの部署で行ってもらった。学術・図書部の課長代理を中心に事前の広報活動への支援を受けた。

■広報活動

4 回目の開催となったが、一橋大学の国立市内の駅および大学正門前にB1大のポスターを掲示してもらった他、社会科学古典資料センターのサイトに募集案内を掲載して周知を図るなど、積極的な広報を行った。募

集期間中にいくつかの検索エンジンを用いて調査したところ、サイトの訪問者のなかには自発的に好意的な紹介をしてくださった方も複数いらっしゃったようである。結果として過去最高数の応募を頂くことができた。

■安全配慮

学外者であっても学内の事故については大学で加入している保険でカバーされるため、別段の保険はかけなかった。事故防止のため、実施代表者、分担者が全体を通じて気を配ると共に、実習中は実施協力者を含めて受講者 1.2 人に対してほぼ 1 人の割合で見て周り、十分に指導した。

■今後の発展性、課題

本年度は 9 人（当日 1 人欠席のため）の受講者を迎え、午前 10 時から午後 4 時まで、西洋古典資料とその保存にかかわる様々なプログラムを体験してもらった。書庫見学や保存修復事業の実演等については保護者等付添の方にもご参加いただいた。

資料保存や古典研究の意義の啓発を若年層にむけておこなう取り組みは今後も重要な課題である。なにより、今回選に漏れて受講をお断りせざるをえなかった多くの応募者から、再度の実施を要望する声を多く頂いている。実施代表者の山﨑が本年度までで退職するため、この形式でのプログラムの実施は本年度限りとなるが、なんらかのかたちで機関的な関与によって同様の事業が続けられていくことが望ましいといえる。

【実施分担者】

夏目　琢史	附属図書館・助教
福島　知己	社会科学古典資料センター・助手
床井　啓太郎	社会科学古典資料センター・助手

【実施協力者】　4 名

【事務担当者】

花光　美佐緒	総務部研究・社会連携課社会連携係長